
[研究調査報告] 作詩法とインスピレーション

—— シャルル・ペギーとフランシス・ジャム ——

倉田 清

近代を代表する詩人シャルル・ペギー（1873－1914）とフランシス・ジャム（1868－1938）の作詩の条件について南山大学で研究調査を行なった。

ペギーの場合、ダンテが〈inventer〉（考案する）のに対して、〈découvrir〉（発見する）のだと主張している。ここに独特な創作態度を伺うことができるが、inventerは“工夫する”、“創意をこらす”、“想像力を藉りてする”という意味であり、「企図をもって働く」ことである。これに対してdécouvrirとは“物の覆いを取る”、“発見する”、“存在する可視的、不可視的なものを見出す”という意味であり、「直観をもって働く」ことである。そして、ペギーは「恩寵の指示に従って」(selon les indications de la grâce)、自己の深い泉から湧き出すものを発見しながら、ある時期には、毎日、午前中50行、時には、100行の詩句を創っている。「発見するためには、偶然ではなく、不定の漠然としたもののうちではなく、中心的な点に対する絶え間ない照合を行ないながら、すべてのものが湧き出る深い泉を自己のうちに持たなければならぬ」と、彼は言っ

ている。そして、このようなペギーの創造の精神的条件は、二十世紀を代表するもう一人の大詩人ポール・クローデル（1868－1955）の大洋の絶え間なく打ち寄せる波浪として表現される詩句がまさに示すと同じように、ペギーの言う内的湧出の絶え間ない緊張と明晰な思考の力によって秩序づけられる。

ところで、単純で清楚な詩句で“自然”と“恩寵”を和解させたジャムは、自然の描写にせよ、感情の開陳にせよ、内的なものが少しづつ昇ってゆく時、そこに働くのは聖なる“震え” (frisson) であると言う。詩人は、一瞬一瞬にこの震え、いわば、神の震え (tremblement)、天使の翼の起こす風というようなものを内的に直観するのだと述べている。これが詩人の内奥に働くインスピレーションである。(Le Poète et L’Inspiration, p.42) このジャムの説は1922年のものである。

これに対して、ペギーは、すでに1910年、“書く震え” (tremblement d’écrire) について述べている (Victor-Marie, comte Hugo, p.695)。ジャムよりも12年先んじている。哲学者アンリ・

ベルクソンは、この震えについて、「意識はどの瞬間の中にも何十億かの振動を含んでいる」と言っているが、芸術家の創造的意識こそ、詩的インスピレーションであろう。インスピレーションによって思考された思想、構想を与えられた芸術作品、着想あるいは夢想された詩は、言葉や彫刻や絵画という物質上にそれぞれの独特な論理に従って創造されると言うことができるのではあるまいか。生命論による直観と論理との関係が考えられる。

ジャムは、自由詩から伝統的な韻律法の真髄に近づいてゆくが、定型詩の古典的なリズムに戻って厳正な格調で、誰にでも判る易しい言葉で、人間の寂しさを、苦しみを、そして、喜びを詠う。彼は対連と四句連の形式をとる。二行づつ相伴って沈黙から湧き出る調べは、それが通り過ぎた後心の中に長い余韻を残して、ふたたび静寂に帰る。われわれは、詩節の一つ一つに超自然の流れが通っているのを強く感じることができる。

一方、ベギーは、さまざまな感情や思考を示す

ために、内的振動のメッセージを書き写す状態を〈C'est dicté.〉（口述されたものを書き取る）と言い、「作家（詩人）は、言葉の絶えざる流出の中に生きており、いくつもの世界が一瞬ごとに作家（詩人）の筆先を通過させられる。波浪の打ち寄せる大洋はその尖端の厚みと幅しか一度に通ることができない」と述べている。例えば、彼の1万5千行の及ぶ一大叙情詩『エヴァ』（Eve,1913）は、宇宙と歴史と人間の条件についての冥想詩であるが、この大作は、全体にわたって一つの区切りも章もなく、「厳しい制御から瀑布となって落下する詩句の絶えざる奔出であって、すべては噴出であり、秩序である」と詩人自身が言っているように、常に新しく、自発的な噴出の観念を示すものであろう。

ベギーとジャムにおける内的震えとしてのインスピレーションは、すべての芸術家の創造的意識の根源に実存するものであろう。

（1992年7月、10月南山大学図書館にて）